

シンポジウム「ワーキング・コモンズとラーニング・コモンズ」参加報告

後 閑 壮 登 （信州大学附属図書館 医学部図書館）

1. はじめに

2018年3月2日、同志社大学PBL推進センター¹⁾主催のシンポジウム「ワーキング・コモンズとラーニング・コモンズ ～意欲的な学びを誘発する創造的な環境とは何か～」が開催された。信州大学中央図書館からは、当時学修支援を担当していた後閑、正武田、およびライティングアドバイザー1名がシンポジウムに参加したので、本稿で内容を報告したい。

なお、このシンポジウムへは、高等教育研究センター加藤善子准教授の科学研究費補助金「初年次セミナー受講生の『ふりかえり』を基盤とした学習支援のあり方に関する研究」の研究協力者として参加している。

2. シンポジウムの開催趣旨

シンポジウム冒頭では、同志社大学教育支援機構長 植木朝子副学長、およびPBL推進センター長 山田和人教授から、主催者挨拶と趣旨説明が行われた。

大学においてラーニング・コモンズが広く普及してきた中で、これまでの活動を検証し、問題点を洗い直す時期に来ている。中学・高校でもアクティブ・ラーニングが取り入れられており、一方で社会では「働き方改革」をキーワードに、職場環境改善が大きな課題として論じられている。両者の間にある大学、その中の「コモンズ」を、学びと働き双方の視点から問い直す必要があること、テーマの一部である「ワーキング・コモンズ」は、そうした問題意識から今回のシンポジウム開催にあたっての造語である、といったことが説明された。

3. 企業事例報告

3-1. 「働き方改革」の改革～それでも人はなぜカイシャに行くのか？～

パワープレイス株式会社 プレイスデザインセンター長 濱村 道治氏からは、これまでオフィスデザインを手がけてきた立場からの事例紹介として、営業部門でのワークスタイル変革に向けての取り組みが紹介された。営業部門にも関わらず顧客対応よりデスクワークの時間が多いという状況を改善するため、機能的な場を全員で共有するという結論に至った。その結果、従来の自席を中心とした「曼荼羅」のような空間から、営業の仕事に必要な役割・場所を分散配置した「Active Commons」への変化が起きた。そして顧客対応時間の増加だけでなく、「提案型」業務への変容や労働時間の減少といった改善が起きたことが述べられた。

また、ラーニング・コモンズに求める内容として、パワープレイスでの学生インターンシップ

の内容も踏まえて「オープンであること」、すなわち大学外も含めた多くの人とコミュニケーションがとれる、フィードバックを得られる場であることが挙げられた。そしてその先にはラーニング・コモンズとワーキング・コモンズがシームレスにつながる未来があることが示唆された。

3-2. 知的創造を促すオフィス空間とワークスタイル変革

コクヨ株式会社 ワークスタイル研究所研究員の樋口美由紀氏の発表では、「新たな知の創造」が今後の社会の課題であり、個人の創造力が価値を生む時代となることがまず述べられた。

そうした中、企業のオフィススペースには3つの要素が求められていることが紹介された。自席のないフリーアドレスに始まり、動線を通したり同僚と目が合いやすいような配置といった「出会う」要素、オフィスにキッチンを設け、一緒に料理・食事会を開催するような「つながる」ための工夫をこらすこと、そして「うみだす」要素として異業種とのアイデアソンや、学生も社会人も集まるコワーキングスペース。こうした要素を踏まえ、オフィス内外を問わない知の創造を促すような場づくりが求められている。

4. 大学事例報告

4-1. 知的好奇心を刺激する、新たな学びへの挑戦 ～アカデミック・コモンズ「明德館」の活用を通じて～

広島経済大学 石田優子副学長から2017年度に正式オープンとなったアカデミック・コモンズ「明德館」²⁾について報告がなされた。広島経済大学では、4つの人間力養成を掲げており、学生が自ら企画し予算申請も行うプロジェクト型カリキュラムを実施している。そのためのスペースである「興動館」³⁾を実践の場、今回の「明德館」を創造の場と位置づけているとの説明があった。

その上で、2017年度のオープンからの利用状況—利用者数やフロアの予約件数、人的支援の状況が報告された。今後の活性化に向けては、学生のニーズ把握や授業連携のほか、教職員へのFDやイベント実施を検討しているとのことであった。

4-2. 良心館ラーニング・コモンズの現状—学習空間と学習支援—

同志社大学学習支援・教育開発センター 濱嶋幸司准教授から、同志社大学の良心館ラーニング・コモンズの現状が報告された。同志社大学「良心館」⁴⁾は学習支援・教育開発センターが運営主体となっており、図書館とは別の建物となっている。柔軟性、快適性、感覚刺激性、人的支援の提供の4要素を持ち、オープンスペースで一緒に学ぶことで他者の学習行動が「情報」になる空間であることが説明された。また、人的支援では専属教員や大学院生のほか、職員や学部生含めさまざまなスタッフが配置された部署横断的な組織となっている。コモンズは「学び方を学ぶ」場としての位置づけがなされ、設置にあたっての理論付け・説明についても触れられた。

これまでの利用状況は、試験期/休業期で波があるが一日平均のべ3,000人程度で、1年生の利用が多めであるとのことであった。またラーニング・コモンズの利用についてアンケートを実施

しており、コモンズの利用頻度が高いほど授業理解度や学習時間、効果的な学習といった能力が高い傾向があった。

一方見えてきた課題として、利用頻度の比較評価が難しいこと、よく使う利用者ほどマナーが悪くなりがちなこと、支援対象をどのレベルに設定するかといった問題や、体制面でも学生や立ち上げ時の支援スタッフは既に入れ替わっており、マニュアルはあっても支援者の力量に負う部分が大きいことも述べられた。

会場との質疑では、広報手段やマナー違反への対応など、参加者の所属・経験を元にしたやりとりがあった。

4-3. 大学院生が学習相談にのる意義

同志社大学ラーニング・アシスタントの矢内真理子氏からは、学習相談スタッフとしての経験に基づいて発表がなされた。ラーニング・アシスタントの目的は、学生の研究・勉強の悩みを解決する手助けをすることであり、同時に大学院生であるアシスタントにとっては教育経験を積む場としても機能している、との紹介があった。相談受付は予約不要、1回30分程度であり、内容はレポートの書き方、卒業論文等での文献調査、プレゼンへの改善意見など多岐にわたっている。時には就職活動のエントリーシートの添削が持ち込まれることもあったが、文章添削以上のことはキャリア支援部署を紹介するといった対応を取っているとのことであった。

続いて、学生の人間関係からアシスタントの意義の考察がなされた。アシスタントは「弱い紐帯」としての立場にあり、先生や先輩・同級生といった強いつながりの中では得られなかったかも知れない情報を保管する存在であることが強みにもなることが述べられた。

活動の中で感じる課題としては、アドバイスが適切だったかの検証が難しい—解決した人が報告に来ることが稀であること、どこまでアドバイスをするか線引き、学生・教員それぞれのアシスタントに対する認識の違い、の3点が挙げられた。学生からの「答えを教えてもらえる」という誤解、教員からの指導の肩代わりのような認識や人間的に不可能な依頼といった不理解にたいし、設置の趣旨を広めていく必要があり、広報等の活動を行っているとのことであった。

会場との質疑では、広報紙作成の経緯や、同エリアにいる教員との分担について質問がなされていた。

5. パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、各報告者がパネリストとなり、PBL推進支援センター長 山田和人教授がコーディネーターを務めた。それぞれの事例報告を踏まえて課題の確認や意見交換が行われた。

企業側の立場からは、ラーニング・コモンズが広がる中、大学が今後に向けてラーニング・コモンズをどうしたいのか、既にコモンズを物足りなく思う学生も出ているのでは、といった、問題提起を含めた意見が出された。また、大学と企業の関係では産学連携という面もあるが、企業

から見ればまだまだ大学は距離があるので、コモンズが大学外との接点とならないだろうか、といった指摘もなされた。

一方大学側の立場からは、コモンズを作るだけで無く活用が重要、というのは同意見であること、活用には授業・教員との連携が重要であり大学全体の問題であるとの認識が示された。また、学生から見ると、全ての活動に意味を求められるのは厳しい、居場所としてのコモンズという側面もあり、大学院生で論文の進み具合を気軽に相談する会、のような集まりがあったとの話も上がっていた。加えて、ラーニング・コモンズをどう評価していくか、改善につなげるためにも評価指標のようなものが必要との意見も出され、会場を交えての意見交換となった。

6. おわりに

今回のシンポジウムでは、普段なじみのない企業におけるオフィススペースについて、さまざまな示唆を得ることができた。大学の事務室を考える際の将来像、また学修支援から卒業後の社会につながるという点で、参考になる内容であった。同時に、各大学でのラーニング・コモンズや学修支援活動についても、情報を得ることができた。利用状況の傾向、また支援にあたっての課題－活用にむけての授業・教員との連携や、必要な学生にいかに関与を届けるか、といった点が共通の問題となっていることなど、改めて認識することができたと考えている。継続的に、学内での検討や情報共有が必要だろう。⁵⁾

最後に、今回のシンポジウム参加にあたって支援いただいた加藤善子先生へ、この場を借りて感謝を申し上げたい。そして、日々中央図書館で学修支援に携わるラーニングアドバイザー・ライティングアドバイザーたちの活躍を祈って、この稿を終わりたいと思う。

注

- 1) 同志社大学PBL推進センター

<https://ppsc.doshisha.ac.jp/>

- 2) 広島経済大学「明德館」

<https://www.hue.ac.jp/manabi/meitokukan/index.html>

- 3) 広島経済大学「興動館」

<https://www.hue.ac.jp/manabi/koudoukan/index.html>

- 4) 同志社大学ラーニング・コモンズ

<http://ryoshinkan-lc.doshisha.ac.jp/>

- 5) シンポジウムに関する詳細は、主催者である同志社大学PBL推進センターによる開催報告も併せて参照されたい。

https://ppsc.doshisha.ac.jp/research/symposium_2017.html